

動物園

芥川龍之介

青空文庫

象

象よ。キツプリングは昔お前の先祖が、鰐わにに鼻を啣くはへられたものだから、未だいまにお前まで長い鼻をぶら下げて歩いてゐると云つた。が、おれにはどうしても、あいつの云ふ事が信用出来ない。お前の先祖は仏陀ぶつだ御在世ごさいせいの時分、きつとガンヂス河がはの燈心草とうしんぐさの中で、昼寝か何かしてゐたのだ。すると河の泥に隠れてゐた、途方とほうもなく大きな蛭ひるが、その頃はまだ短かつた、お前の先祖の鼻の先へ、吸ひついてしまつたのに違ひない。さもなければお前の鼻が、これ程大きな蛭ひるのやうに、伸びたり縮ちぢんだりはしないだら

う。象よ。お前は印度インドの名門の生れだ。どうかおれの云つた通り、あのキツプリングの説などは口から出放題ではうだいの大法螺おほぼらだと、先祖の冤ゑんを雪すすぐ為に、一度でも好いからその鼻をあげて、喇叭らっぱのやうな声を轟かせてくれ。

鸛こぶの鳥とり

あの頸くびをさ、襟ネクタイ飾のやうに結むすんでしまつたら、一体あいつはどうしてほどく気なんだらう。

駱駝らくだ

お爺^{ぢい}さん。もう万年^{おもと}青の御手入^{おていれ}はおすみですか。ではまあ一服
おやりなさい。おや、あの菖蒲^{しやうぶ}革^{がは}の蓐^{たばこ}入は、どこへ忘れて御出
でなすつた？

虎

虎よ。お前はコスモポリタンだ。豊干^{ぶかん}禪師^{ぜんじ}を乗せたお前。和^{わたう}
唐内^{ない}に搏^うたれたお前。それからウィルヤム・ブレエクの有名な
詩に歌はれたお前。虎よ。お前は最大のコスモポリタンだ。

家鴨 あひる

子供が黒板へ白墨で悪戯に書いた算用数字。2、2、2、2、2、2。

白孔雀 しろくじやく

これは年とつた貴婦人だ。お眼が少し赤く爛れていらつしやる。
亀甲の柄のついた眼鏡を持つて、一々見物人を御覧になれば好い。

おほかうもり
大蝙蝠

お前の翼は仁木弾正の鬢だ。面明りの蠟燭位は、一
煽りにも消し兼ねない。さうしたら、鼻の尖つた、眼張りの強
い、唇をへの字に曲げてゐる顔が、うす暗い雲母摺を後にして、
愈気味悪く浮き上るだらう。落款は東洲斎写楽……

カンガルウ

腹の袋の中には子供が一匹はひつてゐる。あれを出してしまつ
ても、まだ英吉利の国旗か何かが、手品のやうに出て来はしない

か。

鸚哥 いんこ

お前は古い唐画たうぐわの桃の枝に、ちつと止つてゐるが好い。うつかり羽搏はばたきでもしようものなら、体の絵の具が剥はげてしまふから。

猿

猿よ。お前は一体泣いてゐるのか、それとも亦笑またつてゐるのか。お前の顔は悲劇の面めんのやうで、同時に又喜劇の面のやうだ。おれ

の記憶は縁日えんにちの猿芝居へおれを連れて行く。桜の釣板つりいた、張子はりこの鐘、それからアセチレン瓦斯ガスの神経質な光。お前は金紙きんがみの烏ゑ帽子ぼしをかぶつて、緋鹿子ひがのこの振袖をひきずりながら、恐るべく皮肉しらびやうしな白拍子花子の役を勤めてゐる。おれの胸に始めて疑団ぎだんが萌きざしたのは、正にその白拍子たるお前の顔へ、偶然のいちべつ一瞥を投げた時だ。お前は一体泣いてゐるのか、それとも亦笑つてゐるのか。猿よ。人間よりもより人間的な猿よ。おれはお前程巧妙なトラジツク・コメディアンを見た事はない。——おれが心の中でかう眩つぶやくと、猿は突然身を躍をどらせて、おれの前の金網かなあみにぶら下りながら、癩かんだか高い声で問ひ返した。「ではお前は？ え、お前のそのしかめ面つらは？」

山椒魚
さんせうを

おれがね、お前は一体何物だと、頭に向つて尋ねたら、私は山椒魚ですと、尻尾がおれに返事をしたぜ。

鶴

県下第一の旅館の玄関、芍薬と松とを生けた花瓶、伊藤博文の大字の額、それからお前たちつがひの剥製……

狐

ふて寝だな。この襟卷め。

鴛鴦をしどり

胡粉ごふんの雪の積つた柳、銀泥ぎんでいの黒く焼けた水、その上に浮んで
 ある極彩色ごくさいしきのお前たち夫婦、——お前たちの画工は伊藤いとう若やくち
 冲うちだ。

鹿

この見事な刀かたな掛けには、葵あふひの御紋散ごもんぢらしの大小でも恭うやうやしく掛
けて置くが好い。

ペルシヤねこ
波斯猫

日の光、茉莉花まつりくわの匂におひ、黄色い絹のキモノ、Fleurs du Mal, そ
れからお前の手ざはり。……

あうむ
鸚鵡

ろくめいくわん
鹿鳴館には今日も舞踏がある。
ちやうちん
提灯の光、しらぎく
白菊の花、
お前はロテイと一しよに踊つた、美しい「みやうごにち」令嬢だ。

日本犬

造り物の柳に灯入りの月が出る。お前は唯遠くで啼いてゐれば
いい。

ナンキンねづみ
南京鼠

うはぎ しろびろうど
上着は白天鷺絨、眼は柘榴石、それから手袋は桃色縹子。――
― お前たちは皆可愛らしい、支那美人にそっくりだ。 後 宮の
佳麗かれい三千人と云ふと、おれは何時いつもお前たちが、重なり合つた楼
閣の中に、巢を食つた所を想像する。そら、西施せいしが芋いもの皮を嚙かじ
つてゐると、楊貴妃やうきひは一生懸命に車をまはしてゐるぢやないか。

しやうじやう
猩々

あの猩々しやうじやうの鼻の上には、金縁きんぶちの Pince-nez がかかつてゐ
る。あれが君に見えるかい？ もし見えなければ、今日けふ限り、詩
を作る事はやめにし給へ。

鷺さぎ

祥しよんずゐ瑞めいの江村かうそんは暮れかかつた。藍あゐ色いろの柳、藍色あゐいろの橋、藍色あゐいろの茅屋ぼうをく、藍色あゐいろの水、藍色あゐいろの漁人ぎよじん、藍色あゐいろの芦荻ろてき。——すべてが稍やや黒くろずんだ藍色あゐいろの底に沈しずんだ時、忽しうち白しろ々と舞あがひ上あがるお前まへたち三羽さんの翼よくの色。——皿の外までも飛とび出でさなければ好いい。

河馬かば

拳こす。梁りようの武帝ぶてい、達磨大師だるまいしに問とふ。如何いかんか是これ仏法ぶつぽう。磨ま云いふ。

水中の河馬^{かば}。

ペングイン

お前は落魄^{らくはく}した給仕人だ。悲しさうなお前の眼の中には、以前勤めてゐたホテルの大食堂が、今も *Aurora australis* のやうに、輝かしい過去の幻を浮き上らせる事がありはしないか？

馬

風の吹く町の角^{かど}には、青銅^{からかね}のお前に跨^{また}つた、やはり青銅^{からかね}の

宮殿下が、寒むさうな往来わうらいの老若男女らうにやくなんによを、揚々と見下おろして御出おいでになる。さうしてその宮殿下の、軍服を召した御胸おむねには、恐れながら白い鴉からすの糞ふんが、……

ふくろふ
梟

Brocken 山ざんへ！ 箒はうきに跨またつた婆ばあさんが、赤い月のかかつた空へ、煙突から一文字いちもんじに舞あがひ上る。と、その後うしろから一羽ふくろふの梟ふくろふが——いや、これは婆さんの飼ひ猫が何時いつの間まにか翼を生やしたのかも知れない。

金魚

うす日の光がさして来ると、藻に立つた秋も目立つやうになつた。おれは、——所々鱗の剥うろこげた金魚は、やがてはこの冷たい水の上に、屍むくろを曝さらす事になるのかも知れない。しかしさう云ふ最後の日までは、やはり先の切れた尾を振りながら、あの洒落しやれもの者のブラムメルのやうに、悠々と泳いでゐようと思ふ。

兎

今昔物語こんじやくものがたり巻五まきのご、三獣行菩薩道さんじうぼさつのみちをおこなひうさぎみをやくものが兎焼身う焼身

語^{たり}と云ふ〔Ja-taka〕の中に、こんなお前の肖像画がある。――
 「兎は励みの心を発^{おこ}して、……耳は高く^{くぐ}せにして、目は大きく前の足短く、尻の穴は大きく開いて、東西南北求め歩けども、更に求め得たるものなし……」

雀

これは南^{なんぐわ}画だ。蕭^{せうせう}々と靡^{なび}いた竹の上に、消えさうなお前が揚^{あが}つてゐる。黒ずんだ印^{いん}の字を読んだら、大明方外^{たいみんはうぐわいのひと}之人とし
 てあつた。

麝香獸じやかうじう

梅紅羅ばいこうらの軟簾なんれんの中に、今夜こんやも独り眠つてゐる、淫婦はんきん潘金蓮れんの妖あやしい夢。

かはをそ
 獺

毎晩廊下へ出して置く、台だいの物ものの残りがなくなるんですよかはをそ。獺おが引いて行くいんですつて。昨夜ゆうべも舟で帰る御客が、提ちやうちん灯の火を消されました。

黒豹 くろへう

お前は齒の美しい Black Mary だ。なんきんだま 南京玉の首飾りや毛糸の肩掛を持つて行つてやつたら、さぞ喉のどをならして喜ぶだらう。

蒼鷺 あをさぎ

何でも雨あま上りの葉柳の匂におひが、川面かはもを蒸してゐる時だつた。お前は、その柳の梢こずえに、たつた一羽止まつてゐたが、「夕焼け、小焼け、あした天気になあれ。」——そんな唄うたを謡とほつて通つた、子供の時のおれを覚えてゐるかい？

栗鼠^{りす}

あおうだうでんぜん
亜欧堂田善^{ぜん}の銅版画^{どうばんぐわ}の森が、時代のついた薄明りの中に、
太い枝と枝とを交^かはしてゐる。その枝の上に蹲^{うづくま}つた、可笑^{をか}しい程
悲しいお前の眼つき……

からす
鴉

「今晚は。」 「今晚は。この竹藪は風が吹くと、騒々^{さわ}しいのに閉
口します。」 「ええ、その上月のある晩は、余計^{よけいなん}何だか落着きま

せんよ。――時におんばうぼり隠亡堀は如何いでした？」「隠亡堀ですか？
 あすこには今日けふも不相あひかはらず変、戸板に打ちつけた死骸がありました
 。」「ああ、あの女の死骸ですか。おや、あなたのくちばし嘴には、髪の毛が何本も下さがつてゐますよ。」

ジラフ

これは玩具おもちゃだ。黄色い絵の具と黒い絵の具とが、まだ乾かずにべたべたしてゐる。もつと尤も人間の子供の玩具おもちゃには、ちつと大きすぎるかも知れない。さしづめあの小ましやくれた、ランファン幼児基督の玩具には持つて来いだ。

金糸雀かなりや

理髪店の店さきには、朝日の光がさわやかに、万年青の鉢を洗つてゐる。はさみ鋏の音、水の音、新聞紙を拡げる音、——その音の中に交まじるのは、籠一ぱいに飛びまはる、お前たちの囀さへづり声、——誰だい、今親方おやかたに挨拶した新造しんぞは？

羊

或日おれは檻をりの羊に、いろいろな本を食はせてやつた。聖書、

Une Vie, 唐詩選、——何でも羊は食つてしまふ。が、その中に
たつた一つ、いくら鼻の先へ出してやつても、食はない本がある
と思つたら、それはおれの小説集だつた。覚えてゐろよ。綿細
工め。

（大正九年九月）

青空文庫情報

底本：「筑摩全集類聚 芥川龍之介全集第四卷」筑摩書房

1971（昭和46）年6月5日初版第1刷発行

1979（昭和54）年4月10日初版第11刷発行

入力：土屋隆

校正：松永正敏

2007年6月26日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.waozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたった

のは、ボランティアの皆さんです。

動物園

芥川龍之介

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>